

はじめに

那覇市立壺屋焼物博物館は平成25年2月に東アジアの陶芸史に造詣が深かった東京経済大学名誉教授・門上秀叡氏とご令室・千恵子氏が収集した厨子190基、そして沖縄陶器関連資料、総計4830点を新たに収蔵いたしました。当館ではコレクションの整理、および一部資料の修復を行った後、平成26年11月1日から12月21日までの間「沖縄宗教藝術の精華 厨子 ～門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念特別展～」を開催し展示公開いたしました。11,222名の入館者があり、また同時に開催した文化講座・古墓見学会にも多数の参加者が集まり、盛況のうちに終了いたしました。

今回の紀要第16号では、門上秀叡・千恵子コレクションの収蔵を記念して厨子に関する研究を特集した号とし、3名の筆者に論考を執筆いただきました。

本号をより理解していただくため、門上秀叡・千恵子コレクションや厨子についての基礎的な説明を簡単に記しておきます。

本コレクションを収集した門上秀叡氏（^{かどがみしゆえい}1911年－2006年）は東京経済大学で長らく哲学・論理学を指導した研究者でした。一方で、考古学・陶磁史への造詣も深く、戦前から母校の日本大学在勤中に、日本大学考古学会の指導者として松村瞭、八幡一郎氏とともにその活動に大きく貢献しました。1960年代から、沖縄から出土する貿易陶磁や沖縄の古窯に関心を持ちその研究と資料の収集が開始されました。ご令室・千恵子氏（^{ちえこ}）の理解と協力を得て沖縄陶磁器関連資料のコレクションが形成されました。貿易陶磁の研究・収集の成果は『琉球出土陶磁社会史研究』（真陽社）として吉岡康暢氏によってまとめられています。

沖縄の死者の葬り方は、死者を墓内に一定期間安置し、その後に遺骨を改めて洗い清めて蔵骨器・厨子に収めなおす洗骨（^{せんこつ}）が特徴でした。厨子には「銘書」といわれる被葬者（^{メガチ}）の名前、没年、洗骨年を墨書、あるいは刻字したものが多くあります。

「厨子」という言葉は、日本や中国では仏像や仏舎利を安置するための宮殿型や箱型の仏具を指していました。沖縄では、おそらくは崇拜の対象である先祖の骨を納める重要な箱であることから「厨子」という言葉が蔵骨器の意味で定着したものと考えられます。

洗骨の風習は13世紀頃に中国南部から導入されたと考えられます。それ以前は土中や洞穴に葬られていたようです。洗骨はまず王族の葬法として導入され、やがて上級士族も行うようになります。多くの庶民は風葬に近い形で洞穴等に葬られていましたが、近世にはいと一部の余裕のある庶民にも洗骨と厨子の使用が浸透していきました。19世紀後半には奄美諸島から八重山諸島までの琉球王国版図内の広い階層で普及していました。

14世紀、有力者や王族の洗骨には木棺や中国産石材を利用した石棺が利用されました。その後はサンゴ製石棺や土器・貿易陶磁の大型壺の転用なども加わり、17世紀に陶器生産が本格化すると陶製厨子も盛んにつくられるようになりました。

13世紀から16世紀頃まで王家では死後数日で骨化させたとの記録が残っていますが、20世紀の庶民の間では数年後に洗骨が行われるようになります。洗骨の風習は沖縄で長い年月をかけて独自に発展し整備されていきました。17世紀の薩摩侵攻以降、亀甲墓（カーミナクーバカ）と呼ばれる大型墓も作られるようになり墓の制度や規制も整備されるとともに、洗骨の制度も整えられ『四本堂家礼』のように手引書の役割を担う記録も残されるようになりました。

明治時代以降、政府の方針として火葬が推奨されると那覇など都心部を中心に徐々に浸透していきます。戦後、1970年代まで洗骨は行われていましたが、現在ではほぼ100%が火葬で葬られています。

門上秀叡・千恵子コレクションの収蔵と整理・保管、および特別展開催・報告書発行については沖縄振興特別推進交付金が活用されました。